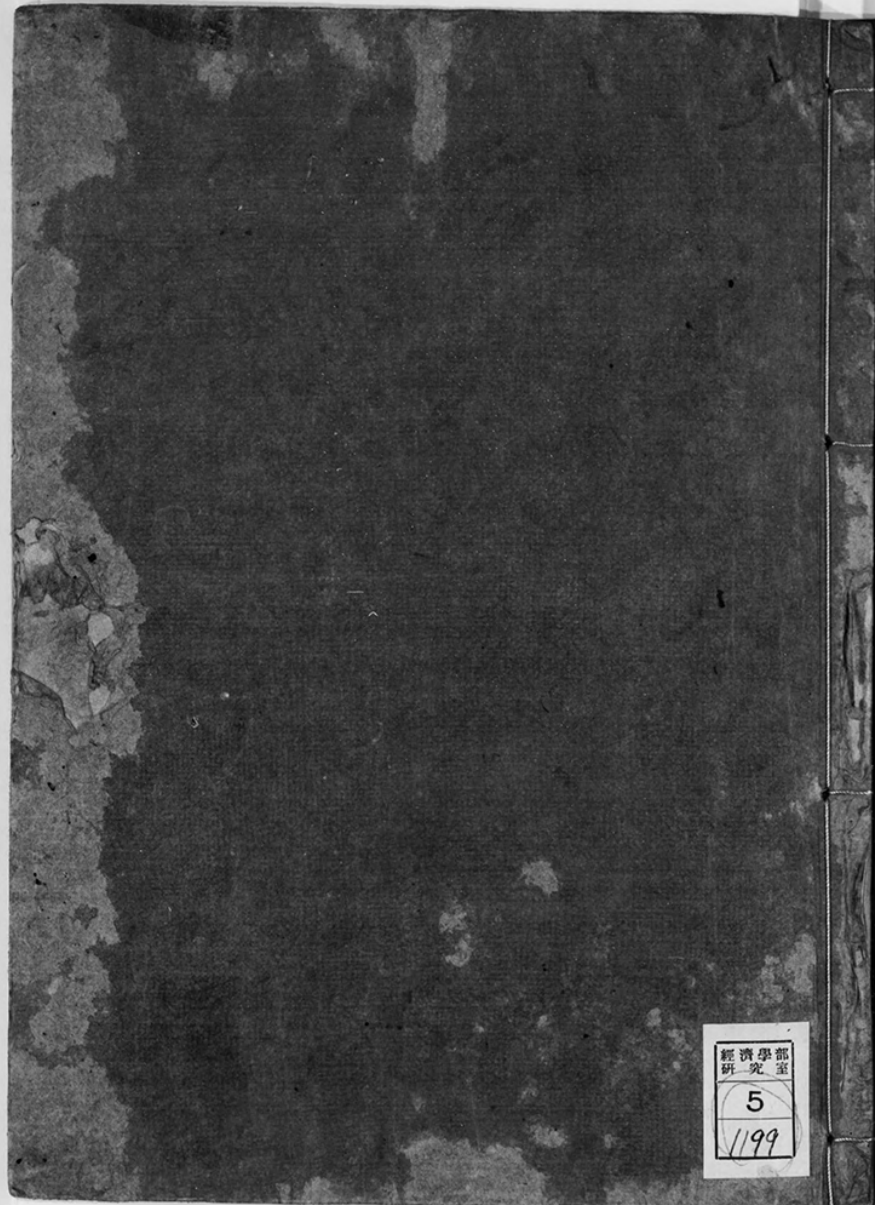


近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。



經濟學部
研究室
5
1199



經濟學部
蔵
5
1199

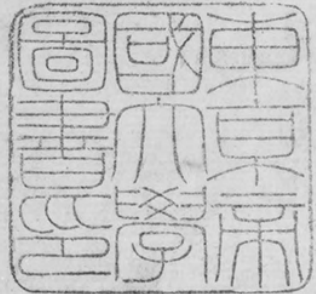
童蒙酒造記

卷之一

酒造一切心得之夏
酒道具積リ之事

卷之二

菩提性仕込之事
煮元仕込之夏
水元仕込之夏



経済

38452

朱書

卷之三

寒造仕掛之夏
生酒仕掛之事
春造仕掛之夏

此一部努ユツク不可致他見者也

童蒙酒造記卷一目錄

- 一 和漢酒カシ濫觴ラシセウ之夏
- 一 酒小徳多キ事
- 一 酒の吳名ウの事
- 一 酒小名コナ口クの夏
- 一 酒造ふらウを付る年トシ之夏
- 一 新ニホ米コメ古コ米メ之夏
- 一 米の買心カウ始ハジの事
- 一 米メ後ノチ年トシ概カウの事

- 酒造不得失^しゆ^しす
- 酒十年^の瓶^のす
- 薪火^の積^りの^す
- 谷^の種^のす
- 働人^の教^の積^りの^す
- 谷^のす
- 一ツ仕^の瓶^のす
- 井樓^の瓶^のす
- ぬ指^るす

- 松新^の瓶^のす
- 新^の瓶^のす
- 吾^の口^の本^のす
- 桶入^の石^のす
- 桶^の底^を洗^ふす
- 土^を洗^ひの^す
- 秋^の洗^ひの^す
- 洗^ひの^桶于^しか^の城^のす
- 桶^の底^を洗^ふす

朱書

- 一 破仕掛のる
- 一 糠積りの事
- 一 白弟傳の事
- 一 弟波の事
- 一 龍の事
- 一 石飯の事
- 一 麴仕掛の事
- 一 石の事
- 一 道具名の事

和朝酒濫觴之夏

一 神代曰往昔素盞鳴尊自天而降到於
 出雲国簸之川上時聞川上有啼哭之
 声故尋声覓往者有一老公与老婆中
 間置一少女撫而哭之素盞鳴尊問曰
 汝等誰也何為哭之如此耶對曰吾是
 国神号脚摩乳我妻号手摩乳此童女
 是吾兒也奇稻田姬所以哭者往昔吾
 兒有八箇少女每年為八岐大蛇所吞

今此少女^{ラトメ}且^{カレ}臨^レ被^レ吞^レ無^レ由^ニ脫^レ免^ニ故^ニ以^テ哀^ム
 傷^ト素^ス盞^シ鳴^ク尊^ノ勅^シ曰^ク若^シ然^ル者^ハ汝^ハ當^レ以^テ女^ヲ奉^ル
 吾^レ耶^ト對^シ曰^ク隨^フ勅^シ奉^ル矣^ト故^ニ素^ス盞^シ鳴^ク尊^ノ立^テ化^ス
 奇^ク稻^ノ田^ノ姬^ト為^リ湯^ノ津^ノ瓜^ト櫛^ト而^テ捧^ル於^テ御^ニ誓^ス乃^チ
 使^シ脚^ヲ摩^ル乳^ヲ手^ヲ摩^ル乳^ヲ釀^シ八^ノ醞^ノ酒^ト云^フ
 一 其後人王三十九代天智天王御宇駿
 河国富士郡竹叟^{ツクサト}云者受^テ竹翁竹切
 本^ニ一^ノ節^ヲ殘^リ而^テ色^ヲ養^フ鳥^ノ合^シ米^ヲ未^テ彼^ノ節^ヲ
 入^レ連^レ積^リ而^テ後^ニ受^テ雨^ノ露^ヲ潤^ラ成^リ酒^ト味^ト

妙也

漢朝酒濫觴之衰

一 因^レ機^ヲ活^シ法^ヲ曰^ク往^ク昔^ニ儀^狄作^リ酒^ヲ而^テ養^フ進^ス
 之^ヲ禹^ノ禹^ノ飲^シ而^テ甘^シ之^ク
 一 本草綱目曰^ク戰^國策^ニ云^ク帝^女儀^狄造^リ
 酒^ヲ進^ス之^ヲ於^テ禹^ノ說^ク文^ニ云^ク少^康造^リ酒^ト即^チ杜^康
 康^也然^ル本^ニ草^ニ已^ニ著^ス酒^ノ名^ヲ素^問亦^チ有^リ酒^ノ
 醬^則自^レ黃^帝始^メ非^レ儀^狄
 一 或^レ書^ク曰^ク皇^帝代^ニ下^ニ着^シ造^リ始^メ也

朱書

天竺酒濫觴之夏

一天竺^六弥多羅王十九代之時免甲者
作始也

酒之德多^千夏

一曰棧活法曰酒者天之養^三祿帝王所
以^三顯養天下享祀祈福扶老^三交歡百
福之會非酒不行酒有清濁厚薄之
不同故清者曰醪清而其曰醪濁曰

醪^{カウ}

醪厚曰醇^三重釀曰酎^三薄曰醕^三一宿^三熟^三

曰醴^三養者曰醑^三紅者曰醖^三綠者曰醕^三

白者曰醴^三麥酒不去滓而飲曰醕^三

一本艸綱目曰行^三茶勢^三殺^三百邪惡毒氣^三

通^三血脉厚腸胃潤^三皮膚散^三濕氣消^三憂

癸怒^三宜言暢意養^三脾氣扶^三肝除^三風下

氣解^三馬肉桐油毒丹石癸^三動諸病熱

飲之甚良

一古文前集李太白曰天若不愛酒^三星

朱書

不在天地若不愛酒地亦無酒泉天
地既愛酒不愧天已聞清比聖復道
濁如賢賢聖既已飲何必求神仙三
盃通大道一斗合自然但得醉中
趣勿謂醒者傳

一神代卷曰素盞鳴尊立化奇稻田姬為
湯津瓜擲而拊於御髻乃使脚摩乳
手摩乳釀八醞酒并作假八間各置
一口槽而盛酒以待之也至期果有大

蛇頭尾各有八岐眼如赤酸醬松柏
生於背上而蔓延於八丘八谷之間及
至得酒頭各一槽飲而醉睡時素盞
鳴尊乃拔所帶十握劍寸斬其蛇
至尾斂及少斂故割裂其尾視之
中有一斂此所謂草薙劍也以上畧之
頗是酒之德也

一丹波国大江山鬼之城トテ城廓ヲ
構へ酒天童子ト云鬼庄ニテ人ヲ

トル夏限りナシ依之源満仲ノ編子
 頼光公舎才頼義三男義女御前
 其外四天王ヲ引卒シテ彼所ニ至リ
 毒酒ヲ釀シテ鬼ニ吞シメ酪酏スル所
 ヲ心ノ俦ニ討取給フ是乃酒ノ徳也

酒異名之夏

| | | | |
|----|----|----|----|
| 青列 | 歡伯 | 碧香 | 雲泉 |
| 竹光 | 竹葉 | 狂米 | 釭面 |
| 臘味 | 浮蛆 | 浮臘 | 春蟻 |
| 碧友 | 紅明 | 鵝黃 | 若下 |
| 下若 | 村白 | 梨楂 | 紫霞 |
| 桃花 | 夜黃 | 忘憂 | 宜春 |
| 香泉 | 濁賢 | 蒲城 | 松醪 |
| 督郵 | 若村 | 芍屠 | 嬌碧 |

温清 濁醪 真一 魯薄 掃愁 清重 白玉 聖清 香璫

玉落 黃醪 舜泉 香馬 荀荀 聖從 東西 醉候 既醉

麴生 隨香 紅友 白屋 玳杏 莫醇 從事 死贈 金醪

梨華 藉雲 黃封 瑞萑 即官 祈魯 魯温 養祿 杼酒

斗酒 酉水 數樽 雲液 烏程 還醉 麴盃 十旬 沙嬉

黃嬌 養酒 喜金 若岸 治聾 魯味 羽觴 菊水 社田

臘醪 馭鳥 若兩 著岸 帛柔 帛宇 馬桐 竹醪 歌社

明樽 杏村 若村 臨邛 六君 桂盞 馬乳 沙揭 去露

| | | | | | | | | |
|-----|-----|------|------|------|-------|-------|-----|--------------------|
| 醴醖 | 壬露 | 洗泥 | 玉蛆 | 狂茅 | 乳蟻 | 乳泓 | 醇酎 | 般若湯 |
| 君下 | 索郎 | 鵝兒 | 金脂 | 霞酌 | 蟻綠 | 愁帚 | 柔落 | 碧蓮醪 |
| 瓊液 | 坡竹 | 松花 | 孔白 | 玉液 | 綠蟻 | 流霞 | 酌蟻 | 玉友醪 |
| | | | | | | | | <small>白酒也</small> |
| 瑞露环 | 羅浮春 | 吳醴楚瀝 | 劍南燒香 | 綠觴素蟻 | 家之麴米春 | 道傍麴先生 | 麴秀戈 | 九醞 |

| | | | | | | | | |
|-----|-----|------|---------------------------|--------------------------|----|----|------|----|
| 傾雲液 | 栴榔酒 | 疑地 | 屠蘓酒 | 茅柴 | 竹露 | 南岸 | 新醪 | 麴君 |
| 醴綠 | 百川 | 郊歡 | <small>正月元日</small> 菊酒 | <small>薄酒</small> 盃中物 | 玉脂 | 北岸 | 曾緼 | 麴也 |
| 鄂筒酒 | 白薄 | 蘭英 | 若觚 | 鄂城 | 蘭生 | 上岸 | 百茅長 | 茅長 |
| 酌賢 | 桑落酒 | 花前白酒 | 蒲萄酒 | 市沽 | 鄧白 | 下岸 | 上茗下茗 | 新藟 |

| | | | |
|------------------------|-----|-----------------------------|-----|
| 清聖 | 瑤泉 | 重碧 | 麴蘗 |
| 乳酒 | 浮白 | 白隨 | 杏酒 |
| 酌蛆 | 擒奸酒 | 綠醕 | 茗水柳 |
| 臘酒 | 酌聖 | 斟聖賢 | 金波 |
| 狂酒 | 万家春 | 春碧 | 瓊蟻 |
| 蟻浮 | 玉友 | 臘讓 | 甕蟻 |
| 黎衍 <small>謂酒為衍</small> | 樽蟻 | 夏琰 <small>夏曰琰殷曰烝周曰爵</small> | 釀蟻 |
| 逡巡 | 養讓 | 刘伶 | 釣詩鈞 |
| 千筒酒 | 魯味 | 邕文選 | 柴潭 |

麴車 酌君

酒和名之彙

一 神酒 神書三見之 御酒 伊勢物語 清酒 和名集

一 三寸 感陽宮之宮吏 九獻 下学集 今花まの

源氏お行少之也 依介 吳宝能毒 篠 日本世話

あふりの泉 みは みは あふりの泉

朱書

酒造り小吉口出りの

一 あやふ 酒小大吉祥口

一 あさむ 酒小大悪日あり

酒造り小吉口付厚年

一 国は前年ハ悪る勝る故におこ依く元おまき

おこし字を付し一又悪年ハ弟ハ性悪

由ハ酒造り小吉口故におこし字を付し一

新第古弟

一 古弟ハ佛進（己子）一 雲（か）一 酒小吉口（出）

あり新第ハ反く

弟買（き）口出の夏

一 世の甲獨り能年

一 秋分古弟言正年

一 去年子買小利翌年

一 壬午并續中下り諸善人換付る翌年

右田子條めけし年ハぬ能生く冥り

一 世の甲悪交年

一 秋分古弟下正年

一 去年より買利は翌年

一 今年より買利は翌年

一 翌年必年の値不買りて買人多きおこ

依りて買利するまおこ但しその年の買下

りまおこ

右に左除めけいりハ買利能ハ右に左子

物年お遠く無しハ可考之

一 延宝五己年世中中初秋米を名世斗

位末少きを名世斗位

一 同六年年世中上初秋米を名世斗位末

少きを名世斗位

一 同七年年世中中下初秋米を名世斗位

末少きを名世斗位

一 同八年年世中下初秋米を名世斗位

位末少きを名世斗位

一 同九年年世中上初秋米を名世斗位

末少きを名世斗位

一 天和元年年世中下初秋米を名世斗位

末少きを名世斗位

朱書

癸卯年之初秋九斗四斗外ハ末ハ七斗二斗
位斗ハ初候ニ上リ六斗ハ七斗位斗ハ
七斗外ハ大飢饉京師一日ハ餓死ニ商人
館ノありしの積りハ冬ニ止ム尸川ニ如シ

一曰武成年世中上ニ年足不中ハ初秋米
止不斗ハ斗外位末斗斗外斗外斗外
斗外斗外下リ斗外斗外斗外斗外斗外
斗外斗外斗外斗外斗外斗外斗外斗外
世中抽テ餘ハハ餘斗斗斗斗斗斗

一曰三亥年世中上ニ初秋米斗斗斗斗位
末斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗
斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗

一貞亨元子年世中上ニ初秋米斗斗斗斗
斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗
斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗

一曰卯申年世中上ニ斗斗斗斗斗斗斗斗斗
斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗
斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗

以依し初秋を乞ふ七斗七斗分束し依し
下り言ふに乞ふ七斗七斗分束し依し
下り言ふに乞ふ七斗七斗分束し依し
買人乞ふに依し言ふ下りし依し乞
暮秋前不依し上り言ふ七斗七斗分束し
依し

- 一 曰三宮年世中中の下七月末を風吹き
依し乞ふ言ふ去年廿二刻程にありし
一 初秋を乞ふ七斗七斗分束し依し上り言ふ一

石を斗と三月八日を乞ふ言ふ下り言ふ
而も二月の依し上り言ふ下り秋を乞
ふ乞ふ言ふ七斗七斗分束し

酒造不得失之初ののり

- 一 第拙て下言ふ言ふ元付き言ふ言ふ古言
ありて困ても言ふ言ふあり
- 一 世言言ふ言ふ換言言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
- 一 第拙て言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

朱書

おし依し初^{こねり}第^し秋^しのり^と言^ふ止^む成^るあり
 好^しふ^まひ^の外^に造^りて^終る^{もの}も^おし
 右^めけ^の年^ハ大^概多^く造^りて^より
 一^件一^概不^定め^る一
 一^米大^体下^止成^り少^くて^六世^百回^多少^長
 一^前年^回言^利多^く年^ハ世^百必^す少^く造^り
 一^若抽^て言^止成^り年^ハ世^百必^す少^く造^り
 一^伴一^言止^成り^考て^後別^多く^造る^{もの}

右^一月^拾元^合形^勢あり
 右^三ヶ^條め^けの^年ハ^大概^多く^造る^{もの}

西十年概のり

一^近宝^又己^年言^第止^成り^ハ前^年第^十年
 概^の不^定め^る一^自止^成り^下何^も不^定め^る
 前^し法^向江^戶積^積結^月合^後取^部
 朱^位地^賣法^向合^を取^部七^斗六^斗位
 斤^白ハ^合を^取部^七斗^六位^賣立^取
 利^を割^取部^七斗^六位

一 曰六年年當江戸積徳白振結有金九
兩五斗位但一地賣取八斗位斤白
五斗五斗束程下り中以賣立熱利
寺割程有

一 曰七年年當江戸積徳白振結有金十
寺沙取位地賣徳白取七斗五斗位
斤白九斗五斗位一三割七上テ酒
法度沙程以後ハ江戸も積上七取
但一秋前ハ五取也右ハ五取以上

沼拂爲之賣立熱利之割程

一 曰八申年當江戸積徳白振結有金
振上取取位地賣徳白取五斗五斗位
斤白江戸積振結有金振上取位徳白
と少一取造之熱利五斗五斗位八斤白
徳白七斗位造り小利五斗五斗位地賣
八取八斗位取束上八二三割上り中
當年七取程有賣立熱利之割程程
あり

一 天和元酉年言法白江戸積振結有
 全振之由是方位地賣法白四斗六
 升八斗之計而之斗八升之賣中
 少計之由是於年八安手物不利を依
 之法白存造了了行白公之之計地
 買之賣拂中由九高利之之計西高利
 以獨右日高賣之立熱利計割
 一 日計成年言法白江戸積振結有全九
 斗計方位候之復中下由中緩之

一 一 日三年言法白江戸積振結有全九斗
 位地賣法白五斗九升五斗行白五斗
 五升世高尚年西津山少之計一高賣
 少計法白八高人多之由是時計中

一 貞享元年子年舊法白江戸積振結
付令八也幸部方位地賣法白九斗并
位斤白幸名之斗分候之上り後は法白九
斗斤白幸名之部斗小賣仕也中土賣立也
利幸割幸分祝

一 旧部五年舊法白江戸積振結付令七
也沙方位地賣法白也幸名之斗并位

候之上り舊法秋前八斗并位斤白幸
石五斗沙并分候之上り幸名之斗小賣
中以當年八斤白世召拂座也前年斤
白利幸之候當年斤白無救造り中候之
大形徳人上り也沙法賣切中候之
利幸賣立也利幸割幸分祝

一 旧二年舊法白江戸積振結付令
幸也沙方位上り候之上り復中下並成
九也八也七也五也小賣中以當年八斗

西入伴致一同倉為請り印下官定舊積
至中伴之依り替り西多く故も伴一
少一風味不真、故ハ替りとも付て中
分正候は是計之方より所支と云書中
控中ち月五七月以下備少下云云於地
書書七斗沙斗の候、下云云於夏秋
前小ハ八斗沙斗位斤白九斗云云の候、
是名云斗之云書上云是ハ五年并積利
云々、故雖小當年米下云云付世目西

多く造る故大換立申下、前代米
之候、是より賣立書算用云、割米の換
金也

一 藪大積り

一 藪ハ西而云、付代銀ハ孫又大伴上
方、め計の積り、こ田舎ハ今少、下云云付
伴一、藪、こ、下云云、或ハ焼取、
少知、云、一、概、ハ、定、云、
傷人救積り、云

一 酒子石小働拾人供し藺作古し印こ
供し石石き人少き子し難成かし
多き能子し能は

谷之櫃

一 谷之櫃ハ毎年正月替て能は大年能は
一七火交播事火の操ちかくこあき故形多
く入るこ又席とて谷の下よ石と取方
よきあきあきとよ小本を横小并後しと
以ハ能燃も燃もつよく形少く入るこ

谷之櫃

一 新谷ハ石瓦少く能磨り形まとと
後口小炭元とくは又つよ時ハ月小二度
能炭を元へ一炭厚く以ハ新多入
あり又谷仕上の時炭を元所少くも元も
白くしてまめ湿りせ元池と塗去とと

一ツ仕上籠このゆ

一 底四尺二寸八寸少く石石蒸し中まは次
編高砂尺少く石石少く編高砂尺少く

朱書

之志以上振まゝ心懸くし中にある大甌の底
甌せうよりいふゆゑあり

井樓甌せいろうも夏

一 井樓甌せいろう又吹抜たりのやまは甌の端を
谷の印端へ切入ちて底あり谷の蓋を
甌の底より口まで底の中はむらね長は谷
の長け小筋を二筋中を一つけてまゝあり
け井樓甌ハ月輪不入く板小息かしも
扱け不りい及新かくるし作し仕掛

六ヶ交自然なるちもまゝあり

あ指さししる

一 火を引てあを指し一火焚くまきあがらあ指し
ハ外を吸あし又蒸の中あ指ハゆまら
してまゝ一合丸前あ指時ハあを指し
杖新道具しる

一 杖形及具ハ底裏ふふらと引包しひら蛙
あり印輪小筋を引包しちぎ西洋際ちぎ中
ハ板始てつふ対扱ゆして洗ふし

新稿之文

一 徳也木取ハ木香強ク好ム功アリト云
ありりして相有ニ安キ乾クセ留シ強ク
又モ初ん指ハ木香弱ク依クモ強シ

吾日本ニシテ

一 一枚の口本ハモ信キ小弱松口本ハ功モ
者アテ不^レしてモハハ^レ苦^カクモモ為^ルコ

桶入石積りの

一 六尺寸 三拾八結入 碇^{イソウ}二仕上^{イソウ}祝入

一 六尺 三拾六結入 曰二仕上^{イソウ}祝入^{イソウ}

一 五尺寸 三拾四結入 曰一仕上^{イソウ}祝入^{イソウ}

一 五尺 三拾二結入 曰一仕上^{イソウ}祝入^{イソウ}

一 四尺 九結入 曰中仕上^{イソウ}祝入^{イソウ}

一 三尺七寸七結入 曰四尺祝入^{イソウ}

一 三尺五寸 三結入 曰三寸七寸祝入^{イソウ}

桶道具洗

一 碇^{イソウ}用^{イソウ}以^{イソウ}分^{イソウ}熱^{イソウ}湯^{イソウ}を^{イソウ}洗^{イソウ}ハ又^{イソウ}モ^{イソウ}洗^{イソウ}ハ
一 又^{イソウ}モ^{イソウ}洗^{イソウ}ハ又^{イソウ}モ^{イソウ}洗^{イソウ}ハ

為不能以何揚信と云身取以下一切の徳
及身桶以下洗ひ盡す

一 用桶との熱湯を洗ひぬすを洗ひ能
酒を五斗一斗兼度も礬を牙洗ひ
礬桶を造りたる酒ハ凡味不直ハ礬を
さる桶洗ひぬす口傳へ

一 清酒用瓶分中と布巾をさすを蓋
て口洗ひぬすハソレも礬を牙洗ひ能
酒中不熟な故桶をさすハ中ハ志く能

礬をさす能ハ

一 火入酒入る桶を洗ひぬすハ中の温湯を
礬を能九斗中ハ

古用洗ひぬす

一 舊古用中形桶ハ度々室蓋以下ぬす
申す熱湯を洗ひぬす又ぬす洗ひぬす
一 舊板板蓋をぬすを洗ひぬす
酒をさす折る也
一 古来より古用洗ひぬすハ兼度小

て毛礬定尼ノ次申小洗カク習ヒ礬之後
洗ハシテモ不宜シ

洗ハ桶干加減之度

- 一 于レ之レハ桶拵ケテヨリ一ツクモ又湿リ
至レハハ礬ヲおシテ程口付アリテ申于
レ之タル桶ツク少時ハ俯臥テ桶内ヨリ並
ビハ透言金ヲおシ

秋洗ハ

- 一 新所送り前一切垢ノ色洗カシ一洗ハ

うき石臼前

洗道電無香丸

- 一 熟臭桶ハ釜の上ニ俯臥テ蒸相度ノ
一又俯臥テ之ヲ申シ又夜露ヲ尚レハ熟
香除ク一又信ヲ介洗道電無香丸一
ハ出善業ヲ要シ一洗カシ一何程ノ熟
香モ除クおシ

礬仕掛

- 一 程本長九尺高七寸巾一守カクハ不踏板

付し但し仕裁ハ旧より六分付し暗板ハのりハのりハ
確七日前小俵申す中し或ハ又七分より小
も仕るハ中し大俵申すよりむひし

一 櫃者申す人守付けゆるををくくして櫃先
減り申すも不陸申すとして用ひし櫃先はし
添し守部ト申すと本ハ始少松申す櫃
本ハ純つらうら

一 程本の以石を分けて掛てえておも守部松島目大
俵し添す能なる

一 弟者から白こと細き丸輪一ツを輪の右サ之
寸半白との後輪を扱あり始より輪は
少く扱少ハ純申すトも少くは

弟者積りのもの

一 弟者名上向小扱弟者申す申部之申部
少くは糖を申す申す申す申す申す申す
糖ふらうら

白米

一 白米ハ赤米脱こが筋あり純扱申す一弟者

少水ハ湯後〜く是弱〜且又少水を六文へ
〜も勿湯風味後交是弱〜泥多きこ
物中元米少嬌〜元粘ねりて大き小熟〜

若研とぎふのり

一 白米を少とせ出切不入あを入捲ちりぬりて埃糠を
流〜二層目能研あを入流を三層目あを
入流〜三〜ハけ時研あを流こ切漸ゆきと煎い煎〜
上げ掛あを〜て若煎とぎ巻小入るこ若研とぎ煎
と入る〜

一 米研煎産おあれ糖を少あす少小必湯泡
沸少泡多ルハ蓋原〜上碇いかり粘りて
揚て湯泥風味後或ハ火を少く乞味小煮
古煎煎後火入の湯像うやま少あせて斤白の
ぬくあるお〜

甌い、浙しやう、煎せんの扱あつか〜

一 釜の印能沸て後一皮小米を煎い煎或ハ六
煎煎煎煎又息括帯て六煎煎煎煎
めけ何く皮も煎煎の〜に少〜煎せ中〜二皮

小籠ひて八息抜兼蒸一垂くは
 一 息抜て後一時蒸へ一擣くは尺粒中
 小白之を蒸へ一中小蒸米をこし擣り
 て香くぬ籠蒸を蒸籠前を以て擣り
 之擣りて籠りて中蒸せしは蒸
 懸して八粒り定あり

麴仕紙

一 室うちさ大伴人共告あきり自由能なりと
 一 梁はりの下少之割ひら横大室小室尤小

梁の口名

一 棚り一ッ仕造大伴六郎中仕造三郎中籠
 八三尺五寸五寸一
 一 室うちハ棚り三とら少付少籠り米尚入る
 一 三才少棚付へ一棚中を人少付仕造之後小
 付へ一五棚言寸三と人中棚言寸少人六寸
 大伴常仕のり端籠上棚ハ恰好次才た也
 一 大室の付八室言寸と油紙少と俵子を法造
 ハ灯あり小月を垂し又ハ息おし少角也

又口も七傳をきりてゆりせ九一
 一 小室禮^{れい}あき時ハ身^みあききり
 一 大室鞠^{きう}あき入る時ハ中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 杉^{すぎ}りきり小室あきり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり入る時
 一 小室あきり鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 小室あきり鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり

席あつて床をきりてゆりせ九一
 一 小室礼^{れい}あき時ハ身^みあききり
 一 大室鞠^{きう}あき入る時ハ中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 杉^{すぎ}りきり小室あきり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり入る時
 一 小室あきり鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 小室あきり鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり
 一 鞠^{きう}あききり中^{ちゆう}の聲^{こゑ}をききり

と燈るく大伴米三所無食んころりと
き所をこし相蓋ハハ古牧ハハそそねと燈
主麻中柳少積あり

一 日夜入灯を觀洗こせそ少亦く花月之ケ而花
葩はな蒸中しそを鞠の是としふしけ時人乳温
らま一右長初来次身よさ上へ中を湯ハ
群むらあり一蓋一蓋不ひらけ擴かのとくまのま
し供一自然室次け時温あつく不ま是んそ
ハけ時のはるきで或ハ二時三時自然ハそ

おま新登をそと物とそ是初来次身仕る仕
はるの口侍し

一 大伴ハ合入る日より之め新白花付し白花
鞠ありハそ時おま一黄花ありハそ中柳
ハ下一てそ映ふおま一自然室次ハ之
日め白花ハ若葉ハ四のめ新室映或ハ若め
とそ中柳おま一そ自然ののこ併鞠
少ありぬ月ハ何とそ中柳おま一其言中柳
自然く上下の柳自然弱くハ花とそ其花おま

朱書

時の為におく上下の細を申す

一 不眠大分今時の大伴必之方めあらず又入不入
温め醒めかきつゝの時の時ハ温め不日申す
一 湯を急ぐ處を急げ仕換へ

一 冷室少食入る時の湯多く入るゝ息屋
アそハ少ゝ氣あても不苦但し少ゝ少ゝ室
ハ或ハ湯を入或ハ火を少ゝ或ハ食を合
車入て息を身するもあり但し湯を強
く今ハハ鞠ましく火を強くい事ハハ鞠ま

くわすおの何れも拾時集ふ

一 鞠少めく後之發室小立けハ度鞠少め又
室小おしてもし教七のハ上立けハ不匠
して償^おと兼茶室あり中

一 多き少き分りして大程小和りハ鞠ハ上鞠
あり

一 月夜鞠ましくあつハ席中食^くたると是ハ
室食^く之強^く之ハ必^く強^くお^く好^くく
る^く但し^く白^くく^く不^く苦^く

くて堅くして白の悪交ハ悪麹（シ）何少名直
 一 白物麹造つて悪交ハ宜と釋（シ）して休多せ
 祀と終て入申ハ侍少白悪麹を（ト）薛少（ト）生ふ
 屋（ト）を或ハ悪交麹盛つる蓋を休多せ
 屋（ト）を能使ハ屋少悪交と終て生ふ一
 ある麹ハ似（ト）の（ト）のあしハ終て生ふ一
 薛（ト）とハ麹の花の（ト）の（ト）を室食の中（ト）少
 一 一ツ食とるる一
 一 麹と生二口とるる一申て生を右の食

の終少て生とくハハ丸かハ悪交一又入
 生と一ハ能麹少あし
 一 取葉とるの蓋而終少盛りて生以上小
 取とる少終少打少ハ終のハ麹少生多
 少但一少ハ屋少生ハ麹屋の業一
 一 蓋とる一ツ仕少ハ終少能ハ半仕但右
 の中少一
 一 室の中ハ掃屋たる一
 一 麹おして生少生少屋とる生と生少使ハハ

朱書

玄一掛藺ハ佛なるこ依し郵部てハ
既少幸ハ既少部てハ既少傳ふこ又部
て日記を記しハ夜藺少部操くこ

酒云事おこる

- 一 室の床合 祝礼部と部と擇食といふ
- 一 蓋少整て之ケ一藺部と部といふ
- 一 藺部とハ藺の花のこ
- 一 和元とハ六中中元とハ之部こ
- 一 元味部とハ旨おまるこ

- 一 落^{ツボ}おるとハ古知合^{ツボ}福まこ
- 一 淫^めめ少ハ懐^みゆるこ
- 一 和^わろく泡^うとハ浸^ひぬるこ大まか泡のこ
- 一 鬼^{おに}灯^{あき}泡^うとハ鬼灯^{おにあき}部て浸^ひぬる泡のこ
- 一 解^く泡^うとハ右左くと細^こか泡のこ
- 一 雪^{ゆき}泡^うとハ雪^{ゆき}の泡^う積^りりたるこ泡のこ
- 一 泡^う掛^かとハ淫^めめ引^ひて浸^ひぬる泡のこ掛^かるこ
- 一 下^{した}り掛^かけ日^ひ泡^うの下^{した}りたるこ掛^かるこ
- 一 中^{ちゆう}指^{さし}とハ日^ひ泡^うたりて後^あ日^ひ部^ぶめお掛^かるこ

朱書

- 一 拵しと六日泡よりて後日殺せる不掛るる
- 一 大拵しと八日泡よりて後日殺せる以上或ハ十日ナかり自然ハ其ノ世ニ成ルとも少ク掛るる
- 一 りあし
- 一 元起おこしとハ流掛るる
- 一 飛とハ流と中むける一口坐るる
- 一 中むけとハ流の初不掛るる
- 一 掛るとハ中分の次三つめの掛仕止るる
- 一 初か掛とハ飛り初少掛るる

- 一 掛位の權とハ中む掛るた不掛る少不掛權の
- 一 るのこ日權とより入ると言ふ掛とより日
- 一 權とより入ると競掛まじとより
- 一 向少權とハ今日掛る時ふゆ言權るる
- 一 言權とハ造り仕止て始る入る權の
- 一 押めるとハ向少權より處て掛るる
- 一 遠とほり權とハ向少權より少掛るる
- 一 下りるとハ碇とら者離れて下るる
- 一 處をとハる多々く及ぶ

朱書

- 一 洗ふとハ水が少きもの
- 一 斗ありとハ掛米を斗に水を入る斗のもの
- 一 高上とハ候令ハ七斗ある斗送る所ありハ中分け少して七斗ほどありといふ
- 一 算用とハ元あるより係中分け候くの多と仕
且少して算用して送るもの
- 一 多るとハ碓うすと扱むけるもの
- 一 時飛とハ今日の候時より明日の候時送るもの
- 一 高日たかひ漬けとハ新米洗ひて晒すもの也

ハ新米も用ゆるもの

- 一 二日漬けとハ今日米洗ひて明日晒すもの
- 一 三日漬けとハ今日米洗ひて明後日晒すもの
- 一 搦なとハ合解あひとをいふもの
- 一 拵こしらとハ釜を煮合せ入るもの
- 一 蒸む自みづ扱ととハ蒸す所扱と手返して自扱みづとて
入るもの或ハ部ぶ或ハ蒸す所自扱みづととハ
或ハ部と扱と或ハ水が扱とたるもの返して醒さを
するもの或ハ人乳とハ湯ゆの温ぬるを返かゆるもの或ハ

朱書

ちと字を指さるとハかき斗注をききよ
視のゆへ或ハ確切とハ一時をて二時をて
至き^{つぎ}視確をゆへ

一 折とハ後ハ一石を入るゆへ

一 突礫とハ亂雑少く礫と礫^{こぼ}ゆへ

一 碯とハ揚^{あげ}前定たる碯の中の佳なる石を及
とるゆへあり

一 石の蓋とハ碯の上の泡をくめて蓋の如く
あるゆへあり

一 石の是とハ石の化のゆへあり

一 出石とハ火不入石のゆへ

一 煮也とハ煮て出さず礫^たなるゆへ

一 煮香立とハ火を乞風味之視替るゆへ

一 落火入とハ手引より前火入るゆへ

一 右体火入とハ手引のゆへ

一 燃火とハ手引が活く入るゆへあり

一 火香とハ火入て後火の匂いなるゆへ

一 花像とハ佳石を平^{ひら}敷のしくくの白きあか

朱書

- 一 来るるししを病といふ
 - 一 泥ぢと火氣火入ひた小桶こづつ底小なる所の濁にごりりて弱よき酒し
 - 一 鹿しか口強ひんとハ續ま酒んとて辛から口のゆこ
 - 一 鹿しか口弱ひんとハ為ひん浸まとて甘あまきゆこ
- 道真みちまこと名なるゆ
- 一 後のちとハ大桶おほづつのゆこ
 - 一 一寸いちじゆんとハ五尺ごせふ一寸いちじゆんのゆこ
 - 一 七寸しちじゆんとハ八尺はつせふ七寸しちじゆんのゆこ

- 一 細こ言ごとハ口くち窄せまくせけるき桶づつのゆ
- 一 壺つぼとハ元もと却かへりの桶づつのゆ
- 一 吹ふ黄わう甌おうとハ井い樓ろう甌おうのゆ底ぞこあり
- 一 次つぎ俵ひらとハ甌おう小次せうじ俵ひらのゆあり
- 一 小狙せうそとハ甌おうの穴あな小せうなるおこ又また猫ねこといふ
- 一 口桶くちづつとハ桶づつの口くち桶づつのゆ
- 一 揚桶ようづつとハ碯いん拵し桶づつのゆ
- 一 手て様さまとハ手て五ご桶づつのゆ
- 一 合あ様さまとハ合あ運うん子こ桶づつのゆ

- 一切様とハ多斗外（トウ）
- 揷桶（サシケ）とハ合（カ）と元桶（ノ）
- 突（ツキ）起（キ）とハ合（カ）起（キ）を（ヲ）篋（カ）の（ノ）
- 奔（ヒキ）とハ極（キ）の（ノ）口（カ）を（ヲ）立（タ）て（テ）下（カ）と（ヲ）交（カ）る（ノ）也
- 突（ツキ）揚（キ）とハ押（オシ）本（ボ）を（ヲ）揚（キ）る（ノ）也
- 桶（ケ）休（ヒ）め（ト）とハ様（サマ）桶（ケ）と（ト）交（カ）る（ノ）也
- 椀（ワン）底（ソコ）とハ底（ソコ）の（ノ）底（ソコ）と（ト）交（カ）る（ノ）也
- 椀（ワン）とハ底（ソコ）を（ヲ）揷（サシ）る（ノ）也
- 元（ノ）椀（ワン）とハ元（ノ）揷（サシ）る（ノ）也

童蒙酒造記卷二目錄

- 菩提性之夏
- 煮元之夏
- 水元之夏

序

夫新酒者自立秋至季秋云夏勿論也
 且亦及立冬造新酒口云造法追時節

朱書

有次才者也惣而新酒者殘暑中同餘
氣伏時節造故甚一旦沸而掛時尖未
油所難成者也縱令寒中一日一夜可
沸程秋中五時六時及立冬追七八時沸
付者也依之弱仕掛習也古今不沸無
樣是以努々強不可仕掛自然過而強
仕掛則必仕損可有者也定法掛二也俱
及立冬冷氣至則自然三可掛欵何口
廣長低小桶以可造努々渡相手不可

用沸醒而後四尺可也

茗攪性之變

一 茗攪性ハ荒熟元とも云之立秋の流より
七八月抽思多時造りて流重
あり潤法ぬ流之自然又稀多時九
十月等も造りて熱多茗攪性ハ掛二つ
泡稀ぬわ之風味ハ古所不似て小味少
き也

朱書

一 善擧性 古実二曰 中一第債カ威亦二破度
自其子弟をさへ修養すの才三彩田少稀
ある強き仕掛の事 中一第善擧の才と云
る也

一 元弟との事 平公之平とて猶も其才之
能彼の債之内十分一合少歎^{うた}理了切て後
荒^{イロキ}歌々或ハ袋不入^{ツキ}漸の中少債と云へ
一 漢多との事 平少才多其才能入下
是を後小元多小仕中漸債下より教を

七八月時分ハ云々 中一第事ありしは九月時分
ハ又云々 中一第事ありしは九月時分ハ
日高り不^{ツキ}漸を債へ一も云々 中一第事ありしは九月時分ハ
一 中一第の威カ破る事ありしは九月時分ハ
中一第の威カ破る事ありしは九月時分ハ
と引ふまじぐりと第の威カ破る事ありしは九月時分ハ
中一第の威カ破る事ありしは九月時分ハ
中一第の威カ破る事ありしは九月時分ハ
中一第の威カ破る事ありしは九月時分ハ

朱書

ろりと必記佛あて但し佛の経弱ぶろ
 一概小定めろし一木俵七八月時分元仕也
 よろし七時八時め程あて右のしとく權の時來
 又し初れも九月あて右のさなるあの時
 形勢定映自然に明後るともあてさる
 るともさるし一七時八時め程あて右の時來
 權入るし一七時八時め程あて右の時來
 てあてい初れ權分係掛時と木俵五時六
 時身あて七時八時め程あて右の時來

入る權の度く右のしとく蓋莖をを入
 流を並し
 一 流來流あて右の初權入んとろあて
 流あて一高し流あて右の初權
 一 流時あてしとく七八月時分初權分五時六
 時め程あて味辛し流あてしとく時掛し九
 十月時分七時八時め程あて右の時來
 へしとくしとくへしとく
 一 流あてしとく七八月時分人形初權九月時

朱書

の月食たる一、ある時は思或ハ沙思の
御事なる時を以て強きは掛菩提
の智之智く物へくを懼て弱きハ元香
所りて思ふ

一 依止しての痛たる一、自是以下
ハ及之のよを伝之―勿論蓋ひする

を

一 抄巻掛巻の米床の掛前小洗之―一 抄
一 抄巻掛巻の時流るる七月時分係り

乙付立付の九月十七日付八時付掛へ―付付
存記らるる祝下―一 紙令りる之を在
掛巻を―くを 古実言 抱紙より下り
一 ぬるも其―一 ある菩提性ハ強きは掛
故佛は是よりくハ流るる事付て後
掛ひてハ懸發ハ

一 抄巻掛巻飯ころの七八月時分ハ釋一切
ハ九十月時分ハ釋像たる一 ころ
一 抄巻掛巻桶ころの元香斗小ハ元香

朱書

南無とて一七八月七日午九十月時辰
少修とて一

一 菩提心より七八月時辰ハ掛るより子時
六時め^ま碁のき守祀とすよとて立てん
と^ま深き事ハ時掛一ハ紙令^ま深き事
ゆへ七時とハ近難一是菩提心の習
法寺仕掛少く佛身ありぬ一九月時辰
次第七時とて^ま越一ハ相部と^ま覆ハ菩提心
二時目入一ハ一と後ハ一日小^ま成夜二

と後^ま夜不六七八度とて^ま合掛一ハ^ま越
菩提心ハ七八月時辰^ま蓋と^ま持せぬ^ま祀掛
る習ひ一^まめ廿二日二夜^ま祀大佛^まと^まり^ま掛
一ハ一と後ハ^ま中^まを^ま通て^ま佛^まと^ま掛一

一 佛身の変掛^ま結^まの^ま日^ま記^ま一^まお^ま三^ま日^まふ^まん
瓦^ま墜^まく^まめ^まけ^ま活^まく^ま佛^ま身^まと^まて^ま桶^まの^ま内^ま湿^ま
^ま頰^まより^ま七八寸^まき^ま入^まと^まて^ま佛^ま身^まと^ま掛^ます^ま中
と^ま深^まと^ま事^まあ^まし^ま努^まと^ま習^まる^ま為^まう^まと^ま紙^ま令

朱書

上中下の上へ思ぐられく、弱ぢく佛ぼつも強ぢく
く、遠くを強く佛ぼつ故こりく佛ぼつ解げゆい
一 多おほく取とりて元もとより佛ぼつ解げゆい
多おほく取とりて一ひとか佛ぼつ解げゆい
一 一度ひとごとおとす多く取とりて一ひとか佛ぼつ解げゆい
一 佛ぼつ解げゆいおとす一ひとか佛ぼつ解げゆい
ゆい佛ぼつ解げゆいおとす一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆいおとす一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆいおとす一ひとか佛ぼつ解げゆい

去こるる事ことをさすは、一ひとか佛ぼつ解げゆい
ゆい何なにもあらずとも、遠く佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
へ、一ひとか佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
一 佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい
佛ぼつ解げゆい一ひとか佛ぼつ解げゆい

古実

沙里沙里は御書に御書に御書に

古之愛硯^石少^く立^け六^石礮^子桶^のより
古^くお^もし月^に礮^をお^もし^て書^をと^り
多^く礮^を以^て礮^の白^く降^す中^に及^ぶり^く
揚^て去^る

- 垂^りの^り菩^提性^一且^佛少^く揚^ける^事
- 心^の斗^をあ^らい^し斗^を衝^くも^しあ^らい^し
- 泥^引の^り云^ふ箱^口殺^す以^て上^を能^く
- 只^の交^は戸^積も^し不^苦ん
- 右^の條^に斤^石の^を収^めて^し法^白小^治る^時ハ

掛^る會^七八^月時^分ハ^月會^九子^月時^分
ハ^人孔^たる^一一^ハ水^石原^九升^掛る^事
用^{して}汲^る

煮元之交

一 煮^元ハ^中秋^の以^り垂^秋の^以て^八九^月
時^分ハ^元子^立一^ハ新^秋時^分に^造る^流
こ^の日^を始^りし^日ハ^十月^と造^るハ^一

束佛とる。故掛ニツシ大伴位換る。少
きおし。多原々。多少。菓の外。小雲泡。一
砂人。と。も。さ。く。あ。る。の。ま。と。も。驚。く。へ
く。も。不。苦。お。し。由。来。煮。元。ハ。海。小。味。を
て。風味。宜。交。あ。し。

一 煮元 古実之度 才一元あり。傳才二煮前
泡の元。紙才之煮。紙才也。煮て。後。落。め
時。と。え。る。の。才。之。掛。財。く。る。の。才。之。撰。に
事。

- 一 元ハ。き。斗。合。之。斗。と。も。揚。り。次。才。し
- 一 元。麴。ハ。第。四。割。掛。麴。ハ。第。之。割。し
- 一 元。為。ハ。き。斗。子。亦。乃。し。是。ハ。煮。る。小。塩。け
付。不。中。乃。く。切。ひ。し
- 一 元。第。ハ。二。日。漬。し。掛。名。も。日。家。し
- 一 元。飯。く。る。の。豆。を。不。煮。し。一。夜。不。入。て。醒。し
切。陰。字。と。仕。也。毎。し
- 一 才。切。粒。く。る。の。ハ。九月。時。分。ハ。き。と。牧。小。亦
持。祝。十月。時。分。頃。く。き。斗。持。志。

朱書

一 元 捲紙くくしり 鉛を喰ふ夜夜火入を成
豆を煮た度 狂捲く

一 元 煮前ももり 日敷二口口を日物ハ十日
走も中切し内一西小鬼灯泡立標を泡
引方少んハ子と煮へー 油引く鬼灯
泡を引せハハ取をわしハ取をわして煮
する元ハ西風味を遠ハ中ム

一 元 煮か減くくし 右の煮の島小入を入を
ろく火を焼元権して油引あり捲金

ハ綿帽子の正くの泡物もおし物とを
泡物なるを煮て泡をて後之が右
の正く中切小入を履して一時飾もあ
うち醒ー かし撫交をく紙ふまをこ
扱又谷不付するハ洗ひて元の中ハ入
ヤム

一 元 煮て後何日でも 落め中をハ捲紙
右日前

一 元 落め時くくし 煮て後一日二日ニ或

朱書

ハガク。少くも少くも少くも少くも少くも佛心
古実三日
 落め初中切て佛せゆくハ落めて泡
 上りふやんけ落字を付るるハ行雲あり
 口傳し

一 元落め初中の元を蓮代少移り何せ
 も蓮少し包蓋無し蓮を何れもとせ蓮
 少ハ八九月時分ハ夜中明影とのる
 小あつり蟹泡鬼灯泡交りて之守

或ハふ守をも上るあこそ時包之蓮丸除
 けやん 古実二 大体めけ自然又葉弁よ
 露より冷交はてより兼ハ延くと温
 めと一平入厚一勿薄十月よりハ落め
 て止小温め入厚一左あてハこらお
 少放不直ん

一 伝付落るるの上方たる泡引付く味
あめあぢ
 幸之温くましく時掛やんけ日教三日
 少めたる一ハ日教延りハ破字お

朱書

こえ御文おてハ親交ハ疎不替めけて
佛兼ハ但丁十月ハハけ敷小一日二日延て
も不苦ハ

一 依言しるハ九月の時分意息イキ又ハ此節
抜へー十月時分ハ部言節延抜へー

一 依ハ多類少ハ前中て成る少く佛時
掛けへー

一 部言掛受時意ハ依ハ掛時よりハ時
六時ハ十月時分ハ七時とてキ部言下

下るーナカ時掛へー又佛の時疎不より

下りえサさるも是へー物る時ハ右ハ

時を考掛へー 古実曰 自然合カあしと意

ハハ右の時ハ必先權を入並合意ハ

中ハ權を入局ハ是ハ中早ハ意ハ時自

然ハるハ兼ておハくもハ細ハおて

彩色強勝小一旦佛の志ハ物るさめけり

ハ權を入モウ撥と抜ハハ勢弱りて佛淡

ハ不ハハ彩色ハ佛セ紙習マこるハ

朱書

一 砂を掛る食しもの 確し切中

一 日多麴しもの 食大形確して 後中て並

少掛屋し 古実曰 八九十月ハ多麴(重)

きうらくひまきこれハ沸丹おく 櫛の付おく
事りて不直

一 造り桶しもの 口廣く長体き桶能は大

体き斗元造り桶を中 尚中て確を

桶中から内少粘せしハ熱りお中ひま

習ひこ十月時分ハ元今迄身たるし

一 苜蓿しもの 八九月時分ハ掛るめか 六時

六時め 苜蓿しもの 下る付捨へし 古実曰

新居大体蓋粘不沸おし 日多沸の掬取

少下りしん(ま)と右の付を考捨へし

初意櫛より 二時め 経小砂を櫛入へし

その後ハ定夜小 七八月中 孝月中 櫛

及今二日一夜 祝の旨ハ 悔意あく 捨へし

おて 油黒ふ 付さの 彩色ハ 蓋粘せし

捨る習し 自是後ハ 定夜小 六六度 度

一 夜ニシテ夜次中ノ減シテ佛醒ルニ掛
 一 一ノ初ハ權を入ル中ニ退シテも一
 一 佛者ニシテ掛置の日ガシク翌日ガク
 一 一ノ口ガ弱クニ口ガ弱クニ弱ク

一 一ノ口張不ヤハルノ揚前シテ垂ノ泥引
 一 一ノ右ノ條ノ行向ノ仕掛ニシテ法向ノ法食
 一 一ノ今ガ一強ク強中動多掛置ノ合人犯
 一 一ノ前後たる一ノ時不降ハ一

水元之度

一 一ノ元ハ立冬ノ前ガ九月末下リ迄
 一 一ノ掛ニツ十月ハ掛ニツ七不若伴一彩酒ハ
 一 一ノ掛下リ掛ニ掛一不不可也中ガ下
 一 一ノ掛けを月ハ一十月末を三十日前ガ

朱書

室之室を而中粒一た多一可依時宜凡
味少味多て酒と為るおし

一 多元 声実曰 才一二階下少なるるの才

二 仕出極くくの才之夜七布一おさるの

才已落多しるの才又匠め入不入部舞

くくの才六掛前擺くくの才七忌擺

く才才八候く擺くくの才九造り

桶く変

一 残置者才世局少くも溜き局ハ去次ハ付

二 階下少元と止るまきく

一 元弟右弟ハ幣弱き故元久変持し但し

新弟少くも不若以評小熱而新河ハ元米

造り米花小右弟能ハ沸くくくハ故造り

能ハ上方新河大概右弟ハ新弟ハ沸く

中故く

一 元し其之申元ハ候く六斗元とあり

但し秋中ハ申元きくも及き能

一 元弟しるの二日漬之掛弟日前

朱書

- 一 元麴し事一米也割能花を付し
- 一 元名之の大作去す身抄外あり
- 一 元飯之の晚方小蒸く元夜入多く醒し
切夜落を法陪之を仕之處一之處持あり
古実曰 吾下りてハ是仕込ても不苦ハ
- 一 中切教之の外七外を身抄持之後一
時法を追て仕之處一
- 一 元搔振之の初夜既之及宛搔一之内
初ハ未の晚ハ夜入て搔一之年一度

夜搔之一きり

- 一 形何元日教しる七持上元と七の内を立とりあり物を之の内を六七十りとも時法外小正建てとりり
とか味分て搔けハ外一めき或ハ不と隣と
或ハ小泡少くもも不と落む一一
け法外外一て中切少く佛セ法く泡立
以ハ落めて泡方兼元番初りて不定
古実曰 形何元日もも七年も佛味

朱書

多て泡入ハ而付小落込ハ一止切光佛
せり元ハ傍めける故落めて泡上り着る事
らも造り小佛急糸交結して甘お水成
依り落め糸交を付る口借し

一落め和りの定部を敷少て包之日重多して
迄ハ大体一夜中小自ら上るおし上り和鬼
灯籠解泡交りて部寸に付寸と上り
大体後泡稀におこり付包定蓋定元
除年一依り物異し時其ハ泡めと用也

くく正未世局暖く於時分きあけて泡め
を入るは糸元少かあり 古実曰 泡交し
時其の元ハ大体り敷七方分内也 事立を
おし是ハ自ら泡上るへ一且亦漸く世局
次ハ時其の元ハ七方以上持おし是ハ自ら
上り急へ一せし時逃るとして泡入へ一
大概九月中ハ泡め不の好日然と候とて
重なりて冷交も倍重りて好むゆて是
へ一大体十月ハ泡めと用也へ一是亦時定

朱書

小舟より一渥め入孤ハきと送り口前あり
面白彩石落めその跡弁口付あり

一 流石の日記泡よりて後二三日不可
至中泡掛け下り掛け半粒一何事も時長
び身用也一物も十月末時よりハ本
粒一事も可不用の時宜ふも一

一 右の内泡子とあるよりたる泡行方の対
其粒を細く割と燃^キ泡をさす程よと
之を角也一火のさる時掛り之依^キ消ゆる

月ハ掛不中ハ是末ハ佛^キ好し元起六
テ後自物考一認め此ハ仕掛^キよと
極多ハ不用い

一 右の内下り掛のよりたる泡を掛引付^キ
味耳に除きて幸^キと^キ時掛^キ一モ
のり敷一日寸或ハ二日程たる一 古実三曰
殊異^キ愛中の彩石を^キ下り掛^キ用
へ一才一元起一考能敷^キ

一 右の内半粒一のより泡よりて後日記にハ

朱書

巾掛るさいふし是ハかゝる衣取りて用へき
 子細ハ沙羅衣^あき日敷と泥ハ元不
 曲^{くせ}お来るおし依^よきき^きき^きし^し仕^しし^し時
 正^まふ^まふ^ま古^こ実^{じつ}言^{ごん}
 泡^う掛^け下^り掛^か半^{はん}拵^{ぢう}
 右^{みぎ}之^の條^{ぢょう}ハ沙^さ羅^ら衣^い之^の中^{ちゆう}或^{ある}ハ初^{はつ}め^めふ
 ると不用^{ふよう}く^く子^こ細^{さい}ハ泥^{でい}衣^い時^{とき}衣^いの^の元
 日^{にち}敷^{しき}と泥^{でい}ハ礮^{たう}衣^いお且^{かつ}又^{また}礮^{たう}衣^い汚^{よご}れ^れお
 し依^よき^き半^{はん}拵^{ぢう}とを^を極^{ごく}と^と口^{くち}傳^{でん}
 一^{いっ}拵^{ぢう}の^の子^こ細^{さい}衣^いて^て後^{のち}日^{にち}敷^{しき}衣^いめ^め掛^かる

し古^こ実^{じつ}言^{ごん} 拵^{ぢう}一^{いっ}ハ十月^{じゅうがつ}末^{まへ}迄^{まで}衣^い小^こ迄^{まで}て
 元^{もと}の日^{にち}敷^{しき}衣^いの^の拵^{ぢう}時^{とき}衣^いの^の元^{もと}迄^{まで}衣^い末^{まへ}迄^{まで}
 礮^{たう}衣^いおる^るの^の子^こ細^{さい}衣^いハ蓋^{かき}と^と廉^{れん}元^{もと}迄^{まで}代^{だい}の
 巾^{きん}の^の礮^{たう}衣^いと^と拭^{ぬぐ}ひ^ひ元^{もと}へ^へ
 一^{いっ}派^{はい}衣^い鞠^{きく}の^の掛^か取^とり^り衣^い外^{がい}あ^ある^る
 古^こ実^{じつ}言^{ごん} 巾^{きん}一^{いっ}泡^う掛^けけ^けか^か一^{いっ}時^{とき}衣^い外^{がい}あ^ある^る
 巾^{きん}二^に下^{した}り^り掛^かけ^け半^{はん}時^{とき}衣^い外^{がい}あ^ある^る
 巾^{きん}三^{さん}半^{はん}拵^{ぢう}一^{いっ}半^{はん}時^{とき}衣^い外^{がい}あ^ある^る
 巾^{きん}四^し半^{はん}拵^{ぢう}一^{いっ}時^{とき}衣^い外^{がい}あ^ある^る

朱書

自是以下中掛け掛け多あり麴何是也尚
座小坐し一ある形はハハ麴子と塔
七故ハ佛身尖トキ小トキく權と子く乞あり
麴ハ各米之割上生あり

一 依食しし九月時分意息ハハ六篇抜し
十月時分思ハ篇意息抜し一 意ハ沙黒の
以の形はとくし尿の弱きハ必元香沙トキ仕換
のりトキしおし 古実言 泡掛七七八篇七
意息抜し一 下り掛ハハ六篇半拈しハハ

篇拈拈し一 之ハ篇半拈し一 何ハ大馬の意
し形時意と違ふハ意仕掛く意きおし
一 中掛け掛け意初權ししハ活し掛時より
六時七時ハ意不意意ハ佛り時初權入し
一 但し時意不意佛意ありハ下り足しき
りしきし一 七時ハ右時上考て拈し一 け時
強く佛意ハハ意りけて意へ一 意ハ形意ハ
掛けの中ハ佛意さる意不造るしおし意
自掛け意足合又も拈し一 大形ハ今一度拈

朱書

塔の程ありて少く能く大伴九月中ハ二ツあり
掛けたるへ——古実言 物置時分ニツ掛けハ
又時立対めし掛る故初程不及ふや今掛け
ニツ掛けと云ふ六向程と延て掛けハ程
前ホ一二度も程と入るおこしきおひこし

一 中分け掛け時々の程の翌日向方程の時分
掛へ——自土勢延まへくも未佛とる
極延てハ不直に併し十月分ハ時と死をばし
死あつてハ元番殊

一 中分け言々の碑切或ハ碑際時長延きたる
へ——

一 三つ掛る時々の中からうし六時七時めとの
り不必掛へ——保合あると兼兼掛時延ハ
ク又ふえ不佛とる押紙ありハあり程入級
分け並へ——十月分ハさうして掛けあるあり
古実言 時置おしよる事ふしハ兼て一扱ふ
定めくくしと云ふ大伴付掛るあり掛け
習ひこころ細ハたきふ所粘佛とる故し

朱書

佛を了として掛前不懼を以てハ幣ひぬけ
掛けて後佛供不ヤシ

一 二重に掛る念を以て一時も確切へ

一 三層に掛るの掛るより六時七時と不存
即ち身下る時捲へ一自是即ち不懼を
即ち身下る時捲へ一午後二日一夜に
百法く佛中ハ念夜小九月中六七度或
ハ十月中六度時子以佛の強弱小なる
一 一上ハ念夜小六度及三度日教ハ

古実言
七重の中佛召ハ捲へ一懼口傳

ある形にハ蓋拵佛おこせ不能入中
ハ物とも佛の袈裟より自然下り足へ
さるるのこま一ハ一十時ハ足ハとも右の時
と考て捲へ一ハ口傳

一 造り桶するの口廣くせけ低き桶能ハ
大作云斗元係を中動か中為めら中
元を斗ニ付掛仕ハ桶を中高りあり
一 あり扱ゆるの桶を中不打るの揚前ハ

了垂くくの中流引取くくの中流中の中大伴
著撰性者元日並に供くくを申撰取くくより
十月時よりより八日教十日以上して流くま
く

童蒙酒造記卷三目錄

一 寒造りの夏 附 生酒之事

序

夫寒造者寒中者勿論寒前自中冬
節寒後及立春節前後都合九十日
与寒造云仕掛太躰同前風味大形

朱書

等然則強仕掛而可沸古今沸過様
味^ヌ痺依^レ之自然弱仕掛^ル則沸兼米氣
残^リ必過^テ可^ク省^ク之者也故渡^ラ為^レ相手造
桶無^ク數用^テ而手強^ク可^ク造但寒^ク前後時
節隨^テ温暖可^ク省^ク勸^テ弁定法掛^ル三也元
米造米與三日漬也元^ノ括^也

元造^ノ半

一 尚流^ニ元造^リ定法^ハ元掛^ニツ^テあり風
味甘^ク口^ノ少^クて尻口^ニ乏^クなりと^モあり

一 元造^リ古実^曰才一寸切^ルこ^シ才二
元^ノ穀^ノ才^ニ三^ノ温^メ引^キ時^分才^ノ也
強^ク造^リ掛^ル才^又元^ノ掛^時才^ノ
才^六後^一才^ノ才^七口^ノ才^ノ
才^八揚^ル才^ノ

一 元米性^ハ好^ク米^一限^白く搗^ル魚^ノ浙^ノ度^ヲ
ひも^一入^キと^入魚^一古実^曰元米^ハ黒^ク
或^ハ洗^ヒ等^ノ兼^おあり^ハ酒^ノ風味^ハ後^ニ
弱^ク也

朱書

- 一 元米三日漬し掛け米日蒸し 古実言 元を中勿漏せし後九十日之日漬能ひ
- 一 元麴米に割花を付し 掛麴ハ米之割白花たるし 古実言 白花麴酒の風味志やんとす 粉のため少くし
- 一 元ある事少抄并 水小甚し 古実言 元花只汲て泥を字せて仕込し
- 一 元食し之能蒸し 元醒けて仕込し
- 一 土月の夜分後ハ二階小元蒸し 古実言

- 一 元米を蒸すに依り下ハ不直し
- 一 一寸切粒し之を少元米切粒たるし
- 一 元搦紙し之を餅を映一日小之皮をくし 古実言 神をくし 蒸すに依り少く
- 一 搦し 一 別てとろりと飯時糰を糰し 搦し恒時時ハ味付と共し
- 一 元落れ米日粒し之を元日粒たるし 蒸し後少く必し落むし 蒸し時ありハ十八九日少くも不若 蒸し時ありハ延び

朱書

一 古実言 此の内介の事を元ハ漸とあり
 と加味付たるを之ハ然中極之の事ハ扱ハ
 未熟臭く味不熟之のけしめて七日敷九
 日前後小おりのハ落めて有るありある
 尚流中切少く沸せしめて大まきおぼふ
 一 落めぬくもの元壺代小移りて延二三敷
 少く包こ日二三敷を包んで立てへ
 一 温め入ぬくもの温を漲くせ一日小一布宛
 大俵三りお云布宛入へ一勿滯入せしる

一 厚毎小捲合せ温之群あへ入ぬるぬ
 仕包一一夜く包こ延蓋延右のよく
 高を入包一延一匠め敷ハ好くお申た
 一 温め引か減のもの鏡泡立ぬりとらふてつ 醜類
 口ふ寸上る付引包一け時包延蓋延元
 除中ハ元お捲ふ中ハ古実言温ハ泡の上り
 振ぬる元申たより一ある泡より蒸粉を
 元之元ハ酒小造りて後七粘りて熟を

朱書

以後は日毎短め上り五七八寸一尺と上り
上るより五寸はた危むへうをさしては
不苦い

一 拵り難くとも古の上はありと大仲之
自是の上世も不及時ハ大拵りとす

古実三言 拵り元味との七の上はありとハ
甘温取付け時造れハ甘口之自是の上世も
不及しハ温辛活く取少し付け時造れハ
辛口不苦味とす

一 係る鞠時との中ハ既方定む前
後ハ夜の引ぬ方少くも一ハ鞠方合入
ると二時一時半一時た多し 古実三言

ハ鞠少くも沸せ予ハ掛前ハ不苦哉
度もハ鞠と拵りしめハ鞠とすくも
る子細ハ掛て後沸強く粘り多あり元
香能除くおし

一 係る鞠仕組との元の蓋と取らして
薄元元と造り桶へ移し是又蓋代ハ

朱書

付するにあらずして洗ひ入庫一惣多法白
流るる大井あり

一流合しもの大伴部之を属言々息抜入へ

古実言 弟のあま元う粘りなま元えう粘

しうめけ大伴ありぬえハ谷よりあふ入

或ハ中を谷より入るるしもの時宜ふよ

へ一極をあら仕込て貯置して申あ

切きつて上りて遊少て包を並へ一遊り

頼まか流弟まきふ

一 流せ戸口の二及捨中ハ

一 申分けるもの流合三日め之掛け境の撰

と入より捨合を及申分ける

一 申分けるもの流合元前不仕へ一

ハ合入系不捨へ一ある申分けるあり

古実言 流く佛迎く元吾あふ大伴

申分けるあま多く及へ一能佛あこ

一 申分ける合人礼事りまて前後時宜ふ

朱書

一 送り桶並に掛並並名

一 掛並の中分けの翌日之掛付塩の糺
と入る掛合せ及なくへ

一 掛並の糺の合元掛る日時ふまじ
合入並不掛へ一 大伴法白を造り七
斗並并あけ掛ける少くも并用して後

一 掛並合食のし人礼也重て前後時宜ふよ
る一 送り桶二本し内き本は後しと

おもしろて一倍掛をへ一 並に送り
桶之重て前後時宜ふよ一 掛ける
田名こ

一 糺糺の掛けるの翌日名一二と
下り付掛へ一 糺合向し糺少く延ゆた
糺の糺重てさるるりハ掛へくを重て後ハ
糺並映一口ふ云るが掛へ一 日敷六
七のり過るるり掛へ一 古実三曰 糺を
を造り法白ハ三日め佛法書あこ依こ

朱書

二のり権意と入久交掩へ〜十日能掩
 扱ひの留み好風味まで長強きおこ
 一 候しふ折る掛留より日教にのみ
 大体折へ〜一俣一佛の強弱小より三
 め候ふも又〜と延て折も是〜
 一 口強射〜の掛留より日教に上十に
 念〜日佛の強弱尺合に身たる〜
 古実三曰 佛弱き候或ハ揚前急きあるハ
 十のり強〜一又強〜揚前強〜あるハ

十のりおし強〜
 一 口強扱〜の厚紙一層たる〜一は為
 紙の射ハ何層も厚紙紙法〜
 一 揚前〜のり教三平のり上平のりより内
 たる〜一高流ハ仕掛ハ強き扱自是
 揚前延よハハ是弱〜
 一 揚前口強扱〜のり厚紙二層たる〜
 一 是厚紙あるハ厚紙の名なき法〜
 一 是扱扱〜の元と中と外はあり

朱書

中より足少く算用して大伴七斗三升
小海一斗五升八匁を初少くして算用
算用して及こ

一 雲のり定造り徳白七斗沙升九分
飯重り中少伴一斗八匁米とも小造
と米何程と算用して足中少

一 揚子泥引振のり天宮能日引魚一
五天の泥立て石置

一 日口敷くもの三斗七升十匁五口日天十七

八口五尺其方天守世世守上尺二寸日
四斗少引急を入口張並へ

一 法尾砂垂泥引る一斗泥より日敷三
口五斗の内子口一斗天宮能日引
へ一急を入口張並へ

生酒の量

一 寒三十日の内小造るし能米を一限白
くして造り大伴定造り日前引
口傳あり伴一斗能辛口小造るへ一斗

朱書

浄きおあり

一 揚前二十日の上四十日より四たき

揚前延はハ足弱きおあり

一 泥の引扱との大体は前二畝泥より
砂多泥とハ右桶不入をあり

一 二畝泥は月長中の次引て新桶不入
ハ

一 四畝泥は秋の惣家の次引て右の新桶不入
入延はハ何ヶ年少ても移るるの事しハ

一 生酒桶との大体云々七寸能ハ大桶
酒を多く攪強く者ハ佛合神ハ
秋の番をくハ故足弱く成しある江
戸積形積形中少く揺動ハ戸少積
蓄少ハとも年来年と少移るるの事しハ
依ハ少桶持及理分明し

春造リ之夏

夫春造者自二月節三月節中造夏勿論也追日暖氣成故弱仕掛習也由來春造沸兼^先無様強仕掛則沸過惡鋪夏^先就中是酒之大毒也當此且有^不掛食一限醒可切且亦擢之夏強搔拔或外夜搔可省見合專一也但元元依為寒造元仕損少者也且亦造桶数増相

手可為渡^去末之春造者可為小桶仕廻^可依時宜造納時節人口息不見時可止

一若^後私^の元^糸掛^糸凡^小二口^漬あり今日洗ひ^ぬる^意一^中之

一元仕^極の^元日^前之

一^半切^粒の^時以^分粒^を増^す

一元食^の之^意元^碑切^夜不入仕^也

時^以少^{より}十日^或八十五日^或八十五日^とも持

朱書

へし其の小及なく予く落西へし一為事又
より内小中切して佛をへりてを

一落め孤しもの定遠白前温め教何か
如く好まざる入る

一枯り口粉しもの定元日前へ供束し
不元をると大枯を確^アにわらわしを
入蓋を云へし

一添しる菊しもの時^イと遊而一時二時
或ハ半時絶^イ前^イして去暖^イを^イし^イハ^イ至

き^イ経^イう^イく^イ

一添合しもの六七を^イ経^イ其^イ息^イ接^イし^イ但^イ
時^イを^イ依^イて^イ切^イ減^イま^イし^イ能^イ合^イ何^イに^イ暖^イ
氣^イを^イも^イ添^イ合^イ中^イに^イ餅^イり^イ弱^イき^イハ^イ元^イ書^イ抄^イ
ア^イて^イより^イし^イを^イ也^イ

一添と中^イの^イ名^イを^イ死^イ世^イに^イ造^イり^イ日^イ前^イ死
日^イに^イ及^イ極^イ魚^イし^イ造^イり^イ痛^イき^イ中^イ

一中^イの^イけ^イ釣^イ糸^イ的^イの^イ小^イ櫻^イ入^イる^イ又^イ截^イ糸^イの^イ小^イ櫻^イ
入^イへし^イ古^イ実^イ言^イ掛^イ時^イハ^イ合^イ無^イ六^イ牙^イこ^イの^イ毛^イ

朱書

心佛之ハ汲みけて並へ

一 中分け食之の少一但之をくく子孫は
て仕へ一末の在ハ大形小碑切へ

一 中分け食之の食元て後不仕之へ
送り桶抄本末之虫口之三本也

一 掛当之の中分けの翌日掛け付ハ食之無
以牙之掛当新程入へ一又掛当不捨食之
汲みけへ一古実言佛之ハ亦く汲み並へ

一 掛当食之の之を發解切て掛へ一末
の虫祀強く次切へ

一 日多麴之の食之無意擧て後不仕之
へ

一 桶敷之の此中を時其少よりて送る
へ一但末の在ハ少桶斗り六中其少
仕上後小房へ抄へ

一 意擧之の掛けるより六時七時八時
程桶の字二三分下るをんで捨へ一自是

朱書

後の朝昼晩一口小ら及捲く一東の巻ハ
叶弁夜捲一度も多し一古実言岩下
巴々の沸流きハあつたる沸流きハ生
く下る依し捲前よりえ板口傳し

古実言日給陽吹の巻ハ昼夜あつた度
とも捲く一めけを付ハ末の巻を
も仕捲く一ハ

一 捲くハ井板の巻ハふらふらと時をさる
合打魚ハ暖家の時をさる捲てハ熱

この巻のあり

一口強極の巻ハ日教十五六の巻の時をさる
揚糸とと動舞して捲く一古実言暖家

時をさる陽字を強給自為ハ揚糸を
延ハハ巻るるるまわし依ハ大形末ハ虫
ハ強糸ハ

一 揚糸の巻ハ日教十五六の巻の時をさる
一古実言揚糸巻是氷あく日教十六
十日と延ハハ巻るるまわしとてハ高ハハ巻る

子等もあつて但し是弱くして火をきく
 乞復古角前後風味後をある也
 一揚洒泥引とも小豆強紙を地り日茶又
 泥引日穀日茶
 一麴造紙を厚紙の元係中ともよ
 多き造り日茶
 一江戸積本を造り大俵七斗ありし重り九
 分即之也
 斤白くす

一重り中より小豆時高く徳白小一階強く
 醒す
 一元仕込紙以下徳白日茶
 一各麴のの係中より小徳白日茶麴よ
 花を分す
 一各厚紙のの大俵斗ありの斤白係斗あり
 中より多しき善月にて汲
 古実言
 自然大を造りあり小係より高り
 小汲へ一撮ありて一層あり多く汲はて

朱書

佛之風味残安也

一 食之より之を中係て身元を痛搔

中分け人形より中弱く掛多温と離れ

次第小入屋

一 食之より之を造り係徳白日分中分け

醒し切るより二時七醒し切冷ま

道言効弁を

是米造りあり今一弱弱く仕掛

大の糲字ハ言佛を安也

一 撰之より徳白口系併し行白ハ丈俣二口あり

小佛強く事之依し二口あり今搔搔

一 之を前後九十日より徳白のより之を

ハ之を搔搔徳白口系

一 之を造り二月迄中ハ之を之ハ之を

造りハ之を之ハ之をハ之を佛強く

造り之

一 渡りハ折れ之 口法私之

朱書

揚象之坊の 泥引紙の

大概法白は茶あり

一 雲の 宇造り 斗の 羊刺 部を ぶと 虫
造り 斗の 羊刺 二と 余

小弟留の年

一 小弟勿漏行而小造り 一 造り 紙法の
本弟曰茶但 小弟ハ 竊發 法の 佛あり
大体より 一 紙法の 部 一 尚も 吾口
佛の 紙ハ 此の 造り 部 口 少成 大と あり

乞足弱きあり 可く 養拂り 一 妙あり 此
啓るあり

一 元ハ 本弟也 掛弟 鞠弟 九 小弟の

一 揚象の 佛の 足弱き あり 口 教 二 十

口 印 たる

一 大体 斗の あり 余の 羊刺 部 分 祀 あり
能 法 是て 皆 何 少 成 たり 吾 鞠の 一 斗
あり

一 泥引紙の 本弟曰茶但 小弟ハ 法

朱書

蒸中及佳乃身小引へ〜身成り好醜
ても佳兼はハ多ク火を入煮候中〜てよし

餅茶の旨く支

一 餅茶餅茶手お〜風味幸〜落口之良
弱く〜て火を多〜く乞候所を此の旨く
お〜勿漏斤向不造〜〜造了取以下
粉茶こぼり曰茶餅一餅〜切て造〜

一 元ハ粉茶あり掛茶ハ餅茶少〜造る
〜〜古実曰餅茶ハ破やぶ〜中おあり依

經濟學部
研究室印

〜小茶ありと〜刻割七新世を以ハ死也
〜不匠也

一 麴少餅茶ハ破〜て仕少〜依〜麴を
粉茶能也

一 茶〜〜斗あり少〜を刻割シハ乾雲り
中ハ古実曰粉茶ハ曰あり少〜ハ一割
方重り少〜ハ〜上風味又〜刻方
薄〜ハ香ハ粉茶と並辰少〜安き
少〜ハ足弱きも換〜〜餅少粉也之

是く糶米の種ふはあぐら
法より糶米日新之

童蒙酒造記

卷之四

酒諸流口傳之支
并名酒仕掛之事

卷之五

酒仕掛口傳之支
酒直方口傳之事

此一部努々不可致他見者也

又
乃
子
乃
乃
乃
乃



